

日本語指導が必要な生徒の高校進学過程 —高校生と日本語教育支援者へのインタビューから—

齋藤 由香利 (同志社大学大学院社会学研究科 院生)

1. 研究の背景と目的

現在、日本の高校進学率は98%を超える(文部科学省、2011)が、日本語指導が必要な生徒の進学率はそれより低いとされている(宮島、2014)。その中で進学した生徒はどのような意識の下に各自の困難をどう克服したのかをより具体的に検討し、今後の支援に生かす必要があると考える。本研究では異文化間心理学の観点から調査1では日本語指導が必要な高校生、調査2では支援方法や支援者の意識を調査するため日本語教育支援者(以下、日本語支援者)とその高校生を対象に生徒の来日以降から高校入学までの支援者との関わりとその支援方法、進学を可能にした要因とその過程を調査、研究する。

2. 先行研究

竹山(2008)は外国人高校生への心理的支援のあり方の研究のため外国人高校生(中国籍3名)、担任教師、多文化共生サポーターを対象にインタビュー調査を行った。その結果、学校内外からの支援と心理的サポートの必要性が示唆された。今後の支援活動に繋げるため来日時から高校進学に至る具体的な支援のあり方を生徒と支援者の意識を交え、検討する必要があると考える。

3. 調査1

3.1. 調査1の目的

調査1では特別枠校入試や言語的配慮を受けて受験した日本語指導が必要な高校生5名の来日以降から受験、現在までの様子をインタビューし、進学に関わる要因とその過程を調査する。

3.2. 調査1の調査対象者

日本語指導が必要な高校生5名(特別枠校に進学した生徒4名、言語的配慮を受け通信制高校に進学した生徒1名)である。

3.3. 調査1の方法

上記の高校生5名(A、B、C、D、E)にインタビューし生徒の視点による来日から現在までの経験、支援、教員等との関わり、進学意識を把握するため事例研究の手法で心理学的に分析する。

3.4. 調査1の分析方法

インタビューを文字化し、各生徒の来日から現在までの経験、支援、意識に関して事例をもとに来日時や受験期等の時点毎に比較し、共通項の要因や意識について検討する。

3.5. 結果と考察

本研究において進学意識に関して3タイプがみられた。学校説明会で情報を得、魅力を感じ進学意識を固めた者(A、B)、家族の影響により将来を見据え進学意識を持っていた者(C、E)、家庭の事情により日本で進学することになった者(D)がいた。各生徒の主な志望校の選択要因は外国籍生徒が多く在籍すること、母語教育がなされること(A、B、C)、母親による高校側等とのやりとりの結果(D)、日本語能力、家庭の経済的事情を考慮し受験可能であったこと(E)だとした。以上から高校進学を促すには生徒側の意識改革だけでなく日本語指導を必要とする生徒が

必要とする学校環境、制度を整える必要があると考えられる。また進学過程において家族の中では母親の影響や関わりがみられた。受験勉強面には1人の生徒に対し複数の支援者等が関わり、個別指導や支援がなされる傾向が見られた。(詳細はポスターに記載致します)

4. 調査2

4.1. 調査2の目的

調査2では生徒からの視点に加え、日本語支援者の視点から生徒の来日以降からの支援の様子や支援意識についてインタビューし、進学に関わる要因とその過程を調査する。

4.2. 調査2の調査対象者

日本語支援者4名(ボランティア3名、中学校教員1名)と日本語指導が必要な高校生7名(特別枠または言語的配慮を受けて進学した生徒4名、一般入試で進学した生徒3名)である。

4.3. 調査2の方法

上記の日本語支援者4名(W、X、Y、Z)とその生徒である高校生7名(F、G、H、I、J、K、L)にインタビューし、日本語支援者と生徒の各視点から来日から現在までの経験、支援方法とその意識、学校関係者等との関わり、進学意識を把握するため事例研究の手法で心理学的に分析する。

4.4. 調査2の分析方法

分析方法は調査1と同様である。

4.5. 結果と考察

進学意識に関して、調査1と同様に家族の影響を受け進学意識を持っていた者(H、J)、家族の事情から日本で進学することになった者(K、L)がおり、さらに漠然と将来を見据え進学意識を持っていた者(F、G、I)がいた。それらの背景には親の教育熱心さや職業に影響を受け大学進学を見据えていたこと、親の来日決定に従い日本で進学を果たした者、高校に進学した先輩が身近にいたことが影響していると考えられる者がみられた。各生徒の主な志望校の選択要因は、教員や支援者の提案(G、I、J、K、L)、家庭の経済的事情と学力(F)、学校の校風(H)であった。受験勉強では教員、塾や学習支援教室など様々な立場の人、機関が関わり、熱心な支援が行われた。また、日本語支援者は日本語の教授に留まらず、進学への道筋を整え、教科支援、試験対策において生徒の弱点を補い、支えることを意識していた。調査1と同様に調査2でも進学過程において家族の中では母親の影響、関わりが見られた。(詳細はポスターに記載致します)

5. 総合考察

進学に際し生徒が支援を必要とする事柄は数多く、日本語や学習面への支援だけでは不十分である。日本語支援者は生徒が抱える課題の克服のため、学校や家庭にも関わりながら、他の支援者による支援内容を把握、協働し、支援を補強することで進学を実現していた。また、家族による支援では母親が進学意識に影響を与えている傾向が見られた。そのため受験期以前からの母親へのアプローチの重要性が示唆される。生徒にとって必要な高校環境、制度も必要とされる。

【引用文献】

宮島喬(2014)『外国人の子どもの教育 就学の状況と教育を受ける権利』東京大学出版会
文部科学省「高等学校教育の現状」2011年

(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/09/27/1299178_01.pdf)

竹山典子(2008)「在日外国人生徒の心理的支援のあり方」異文化間教育、27、62-7